



音楽家と自然

小川均

ベートーヴェンがハイリゲンシュタットで自殺の決意を堅め、後にそこで「田園」を作曲した話はあまりにも有名である。彼は自然を、自己に対する敵愾な対決を休息し、慰め、生きる喜びを求めえる唯一の避難小屋とした人である。ただこの理由によってしか、第八交響曲や田園交響曲が成立した動機を説明することができないし、彼が一生に四〇回も引越した内的衝動を説明することもできない。

音楽家の中で歴史的にも、個人的にもっとも幸福な人「パパ」ハイドンはハンガリーの片田舎で大工の子として育ち、エステルハーツイ家の領主と狩を楽しみ、領内

を馬で駆けずり回り——もともと、落馬して足を負傷してからは止めてしまつたが——ながら、三十年間も規則正しく過ごした人であり、愛すべき正直な人であつた。

それ故に、彼の作品は自然で、素朴で、オーストリア的民謡調の特徴を可能としたのである。ハイドンこそオラトリオ「四季」や「ヒバリ」四重奏曲を作曲するのにもっとも相応しい人だつたのである。彼は天性の自然人であり、田舎者であつた。

モーツアルトはどうであらうか？。幼いときからヨーロッパ中を厳格な父に連れられて、曲芸師のように引き回され、見せ物にされながら育つたのであり、ヨーロッパでもっとも美しい町・ザルツブルクの大司教に仕え、ウイーンのプラター公園を、妻や愛犬といっしょに散歩することの好きな人であつた。それにもかかわらず、彼の数百もの書簡の中には、「自然」に関する文章を一つも見つけることができない。たとえ書かれていたとしても、ほんの敷衍、それも無感ないらだたしさで書かれていくに過ぎない。

彼は徹頭徹尾「室内人」であつた。メーリケの作品に、モーツアルトのプラター旅行の印象を綴つた「旅の日のモーツアルト」という題の小説があるが、この小説は嘘つぱちである。なぜなら、モーツアルトはプ

ラーハへの旅行中、自然を楽しむ余裕もなかつたはずだからである。モーツアルトの数多い曲の中で標題音楽が一曲も見いだせないのは、このことによるのである。

これら三人の聖業が自然と対処する姿勢は、非常に異なつたものである。当然、その精神表現である作品の中にもそれが表われてくる。モーツアルトは自然を拒絶し、ハイドンは自然と調和し、ベートーヴェンは心安めるものとして没入していく。そして、ハイドンやベートーヴェンは、歓喜と幸福をもつて自然を描写した。それがオラトリオ「四季」であり、「田園」である。

ところで、私はよく旅行や登山をする。雄大な峰々を眺め、可憐なお花畑に寝ころんで、偉大な自然を、絶妙ともいえる自然を熟考し、沈黙し、憧憬はするが、私はいまだかつてそのような状態の中で、「田園」や「四季」の一小節をも思い浮かべたことがない。田りの環境——自然がこれらの曲を作曲した当時にくらべ、事態は遙かに悪化し、深刻なものになっているし、楽しむにはあまりにも騒々しいために、私の心まで毒され、陰うつになつてしまふからである。まして現在では、だれもハイドンやベートーヴェンのように作曲することすら不可能であらう。

私は「歌を忘れたカナリヤ」や、カーソ

ン女史の「サイレント・スプリング」を思い出さずにはおられない。現在の人々は、自然を忘却したのではなからうか。

(帯広畜産大学)

公害と自然保護

中村幸雄

「公害」という言葉は、いつ、誰がいいはじめたのか知らないが、おそらくここ数年前からいから発生し、定着した新語である。#広辞苑の第一版(三十三年発行の初版)には、載っていない。その後、いつからこの新語が採用されたか知らないが、四十二年発行の第一版二十五刷には、「共同生活を営む住民一般が、産業の発展などによって受ける諸々の被害。たとえば工場・鉱山などの騒音・煤煙・有害ガス・悪臭・汚水廃液などによるもの、地盤沈下、交通量の増大に伴う被害など」という解釈がくだされている。

また、四十四年発行の第二版には、「公害」とは「私企業ならびに公企業の活動によって、地域住民のこうむる人為災害。煤煙・有毒ガスによる大気汚染、排水・廃液による河川汚濁、地下水による地盤沈下、機械の騒音など」と定義づけられている。

内容は同じでも表現はいくらかちがいが、新版では、公害を起こす「犯人」を「私企業ならびに公企業」とかなり具体的に指摘し、人災であることを明記してある。

ところがイタイタイ病などのように、「犯人」が明らかに指摘できる場合はいい、多くの場合、不特定多数の企業の直接または間接的な行為に起因していて、その原因追及が水かけ論に終わりがちで、「迷宮入り」の被害者泣き寝入りとなりかねない。そういうことから公害などといわれるようになったのであろうが、この災害は明らかに加害者と被害者とがあつて、加害者の責任はあくまでも追及されるべきものであろう。

しかし公害という言葉は、責任の所在をばかすのにまことに都合のいい言葉で、天災ほどではないが、なかば不可抗力的なものとして、なんとなくあきらめを強いる響きがかもつている。これは「被害者」に大企業が多くのことも関連して、産業重視、企業擁護の色彩の強い政府のもとにあつては、公害防止対策などあまり実効を期待できない、というあきらめに通じるものがあるのかも知れない。

自然の破壊が全国いたるところで進行しているが、これも公害の一種とみてさしつかえないのではなからうか。都市とその周

辺の生活環境の悪化を招いているのは、いわゆる都市公害であるが、自然公園などの景勝地にとくに破壊現象が目立つのは、いわば観光公害ともいうべきで、観光関連産業の目にあまるもうけ主義がわざわいしている場合が多い。

個々の観光客の心ない行為も、チリも積もれば山となるのタトエのとおり自然保護の大敵ではあるが、観光客を受け入れる側の企業が資本力にものをいわせる行為は、とりかえしのつかない結果を招くことがあるから恐ろしい。最近では観光関連企業だけの責任でなく、都市公害の延長的現象もみられるようになった。自動車の排気ガスによる植生の枯死なども、その一例である。

先だって新聞紙上に報道されたとおり、富士スバルラインが、シラビソなど珍しい植生群落のなかを突つきつて開設されたために、伐開によって少なからぬ犠牲を強いられたばかりか、こんどはその道路を疾走するクルマの排気ガスのために、残された群落まで氣息エンエンという状態で、ダブル・パンチをくつたようなものだといふ。これは、道路開設という公企業と、マスプロの自動車産業という私企業との合作公害といえるのではないか。

おまけに、この五合目終点にある県営展望台に巣食った食堂が、ジャズやエレキ音

楽を拡声機でがなりたて、ドライバーたちは一日中、この騒音に悩まされているという苦情も聞く。こうなつては、まさに処置なしであろう。これと似たような公害は、北海道にも例が多いのではなからうか。洞爺湖の湖水汚染問題も、性質はちがうが公害が自然環境を破壊する一例であらう。

このようにみえてみると、自然の破壊現象は公害の一面としてとらえることができるのではないか。過密都市における公害対策はもろろんだいじであるが、自然保護もまた公害対策の一環として、あるいはそれと同じレベルに立つて検討されるべき時期に立ちいたつたと考えられる。「犯人」がなかなかつかまえられない点でも、公害と自然破壊には共通点があり、公害対策が地域住民の生活を守るためのものなら、自然保護対策もまた、人間の人間らしい生活を守るためのものであろう。

ひとところ過疎地域の繁栄策としてさかんに行なわれた工場誘致運動が、四日市市などのワダチを踏まないよう下火になり、また、公害予防対策の保証がなければ誘致しないなど、地元の状態が変わってきた。自然保護対策もこれにならつて、まず予防対策を樹てべきではなからうか。

(道立林産試験場)

羊蹄山だより

中須賀 常雄

今年は例年よりおかれて六月二十日、小屋開きをおこなつた。六月中は登山者も少なく、静かな日がつづいた。われわれの仕事は九合目の雪溪へ水をくみにいくこと、燃料集め、見回りで、それも気のむいたとくにすればよいとあつては、まことに結構な生活である。ある日の生活を記すと、九時起床、朝食後水くみ、その後昼まで火口の雪溪でスキー練習、昼食後は小屋の前で作ったベッドで読書、そのまま昼寝、夜は酒を飲みながらお客さん(登山者)と話して、夜のふけるまで――。

しかし、七月になると登山者が多くなつて、その仕事に追われる毎日となつた。この山は夜間に登つて、御来光を見て帰るという登山者が多く、午前二時から明け方にかけて、小屋を訪れる人が一番多い。したがつて小屋番は徹夜となり、昼間は白河夜船とあひなる。こんな日がつづくと、げっそりやせるので、小屋のまじい食事にみきりをつけ、三時間もかかつてラーメンを食べに下りる気持にもなる。

この山は登山口と頂上の標高差が一、六

○Omもあるのに、三時間半くらいで登れる。それに頂上に小屋があるという安心からか、五才の女の子から七八才のおじちゃんまで、南は鹿児島からくる人もあり、外国人もかなり登る人がいる。登り方もいろいろで、一時間半でかけ登る人がいるかと思うと、九時間もかかって登ってくる人もいます、まったく面白い山である。

悪天候の中、ひょっこり現われると、こちらが驚かされる。遅れている人がありますと、風雨の中へとびだす羽目になる。まったくこんな日に登るなんて、でも仕事、仕事。週末ともなると、小屋は満員で足の踏み場もなく、あとの方はハイマツの中にもぐり込んでもらう。土曜日の夜から日曜日の朝までは、本日に火事場のような騒々しさであるが、日曜日の八時頃になると、もう下山する人が多く小屋はからになる。

以上のように、この山の特徴は高い山なのに登山者が多く、その構成員が種々様々であること、登山者はほとんど夏期に限られ、一日のうちでは夜間に登り、明け方に下りること、天候の良否にかかわらず登山者があることである。このことは山頂に小屋があり、番人がいることがその原因と考えられる。

また、夜間登山が多いことは独立峯であ

って、登山道が急なことが考えられるが高山植物にとつては登山者に見えないというところで、それが幸いしてか、人が多いわりには荒されていまいようである。

しかし、年間一万人にもなる登山者が五月に集中することから、高山植物で少なくなっている種類もあるという。このハイキング的登山というこの山の特徴を考えると、それに合ったいろいろな施設の充実と登山者の指導体制の確立が望まれます。

これから山は紅葉の時期になり、すぐに雪も舞うことでしょう。静かになった小屋で、小屋じまいを待っている今日このごろです。

(北大農学部林学大学院)

野生植物の園芸化を

佐々木 雅 人

ある資料によると、自然公園の利用者は年々ふえる一方であり、昨年は全国で延べ二億五千万人を上回ったといわれる。

自然、とくに自然林、原生林がいちじるしく荒廃するのは、無計画な観光開発がそれを助成させるかたわら、林業関係では、去る三十七年に三二五トンが四十三年には八倍にちかい数字に達したという除草剤の使用にもあるというし、そのために山菜が

売れなくなったともいう。また、心ないハイカーや登山者たちによる高山植物の無許可採取であり、これも昨年だけで二四、九一四件で、うち送検六七件、嚴重注意が二一、九九九件といわれる。

このように自然や森林に、その企業なり経済性を求めるあいだは、いつの時代にも「自然の保護」には闘いがあり、後退をよぎなくされ、宿命的なものがあるのではなからうか、と思われる。

「オリンピックだから道路をつくれ、」「いや、それは自然を破壊するものだから、ダメ」と。

ある先輩がいった。「国立公園」には道路をつけさせないで列車を走らせろ、という。しかも、それは電化させる条件で、ともいう。そして、自然の保護はすべて投資と考へ、どんどん木を植えさせてゆけば、人の住む環境もかわってくるし、土地の値上がりもふせげるともいった。

たまたま、ある新聞が掲載していた「林業黒書」によると、国有林の伐採は独立採算性をとっているうえ、約二百億円の利益の半分は財政資金として森林保護以外に使われ、しかも造林保護が遅れているために年間六千億円の外材が関税ゼロで入っている。そして、年間に三百五十億円を投入すれば、自然の荒廃はふせげられる。5%の関税

をかけ、その財源とすべきだという。

それはそれとして、われわれがハイキングや山登りでなじみのふかい高山植物は、自然公園法や森林法で守られている(というよりは、規制されているという印象がよりよく感ずるのである)が、案外に法律によって守られているという事情を知らないのが多くいることで、街のなかでもその旨を表示した標識をたてるなどして、登山者ばかりでなく、一般の人たちの理解を深めることが、すでに下界においても大切なことのように思う。

山へゆけば、なんでもかでも規制されていて、草花に指一本でもふれてはならないという、錯覚をうけるなかで、高山植物をふくめて一般の野生植物の園芸化をはかるべきだとも思われる。

それらをして、彼らの身近なものにしてやり、また、さいきんのコンクリート・シヤングルに住む人たちの「みどりの郷愁」を満たし、いくらかでも親しませ、ふだんの生活のなかにある、花木のようなものとして与えてやるのが、毎年の不愉快な不祥事をいくらかでも減らすことになるのではないかと思われるのである。

したがって、今後のそのすすめ方にあたって、樹芸樹木の研究や植物園の意義も、そこにあるのではなからうか。

「自然公園や、その他の景勝地および休養地などの自然環境に親しむことを通じて心身の健康を増進し、自然に対する科学的興味を養うなど、自然環境の適正な利用の普及をはかり、あわせて自然保護と国土美化の精神を高める」という、精神衛生？

の意味もわからぬでもないが、たとえ高山植物ひとつをとりあげても、いままでの受身の時代から積極的な、なにかがほしいと思うひとりでもある。(道林務部道林課)

いま、必要なものはなにか

国 松 登

ある田舎での話である。

久しぶりに札幌へ出て、帰って来た友人が「札幌もずいぶん変わったね」というので「どんな風に変ったか」と聞いたら、「道路が厚い鉄板になっていった」といったそうであるが、これには単に笑い話と聞いてはいられない風刺があると思った。

緑の多い街として親しまれていた札幌の街も、いまではあちらもこちらも掘り返えされ、オリンピックを契機に大きく変貌しようとしている。街の緑も、最近問題となつてゐる八光化学スモッグVをはじめ一連の被害はもちろんのことであるが、街路樹

の被害のもう一つは、道路や舗装工事などによるコンクリートやアスファルトの樹木の根におよぼす影響や、これによる樹木の根の片寄つた張りかたなども、見のがしてはならないと思うのである。

私は街の中の古い大木や、街路樹に黒と黄の夜光斜線の貼られた姿を見るごとに、街の緑はもう末期にきている思いがして残念でならない。最近では八公害は私害であるVなどともいわれはじめてきた。もともと市町村・県・道・国をはじめ、産業・大企業なども個人の集まりにすぎないから、一人一人の自覚がない限り公害は防げない

だろう。自然への愛は、単に草木だけではない。河川や山、海、空の色など、私たちは広い自然を愛してきたのである。

いま公害といわれている排気ガスによる大気汚染や河川の汚れ、ヘドロなどの原因はいずれも近代科学の所産であつて、礦工業や大工場には、はじめから大量の排気や排液はつきものであるはずである。

工場の大小を問わず、生産に追われ有害な排気・排液の処理までは手が届かなかつたというのが実状かも知れない。つまり、排気物はたれ流しの状態であつたのだ。

昔は川の上流で肥桶を洗い、下流では洗濯や炊事までしていた。さらに下流では、その水を飲んでいたところもある。そのく

らい見た目には水はよく澄んでいて、鮭・鱒も登ってきたし、少年は川原で雑魚をすくい、ザリガニなどをつかんで遊んでいたものである。

最近の人文科学者や芸術家の間では、人間の心(思想や哲学)の問題をいろいろな角度から掘り下げ、分析が試みられている。文芸や美術などに現われている心理分析や思想的・哲学的実証の傾向等々からみて、戦後急速に伸びたあらゆる産業にも企業家・政治家・自然科学者たちの深いメスが必要になつてきたようである。

(全道美術協会々員)

砂 漠

長谷川 雄 七

大國であることの第一の条件は広大な砂漠を有することである。なぜなら、核爆発の実験ができるから。その点日本は絶対に大國にはなれない。しあわせといふべきであらう。

十月十四日に米、ソ、中共の三國が同時に核爆発実験を行なつた。いずれも砂漠である。米、ソはもう何回目になるのだろうか。いつの頃からか、地下実験に変わった。中共の実験は大氣圏におけるもので、

今回で第十一回目の水爆実験のことである。地下にしる大氣圏にしる、核実験はつぎつぎにエスカレートしてゆくのに、近ごろの日本でのこれらの受けとられ方は新聞の見出しが示すように、しだいに小さくなっていく。

今回の中共の実験地も、例によってロプノール附近といわれている。ロプノールといえはかの有名な「さまよえる湖」のことであり、タタラマカン砂漠の東にあつて、その昔栄えた楼蘭の都のあつたところである。国家と政治のまえには歴史も感傷もあるものかといふことであらう。まさか実験に名をかりて、遺跡の発掘をしているのではあるまいから。

われわれにとって何よりも恐ろしいのは、タタラマカンの空が日本の空に直結しているといふことである。地球の自転が逆回転しないかぎり、数日のうちに日本は「死の灰」にみまわれることになる。その量はもしかすると、百年の間に蓄積された現在の日本の公害の総量に匹敵するかも知れない。いままでにもずい分とくり返されてきたい草ではあるが、このまま大國の勝手に許しておいて良いのだろうか。

にもかかわらず、日本のどこからか「砂漠がほしい」という声が聞こえる。恐ろしいことだ。(北海道百年記念施設建設事務所)